# 水府志料附録

封外四

四拾壹

和書門 類 三六四五九 號 一七一 函 一三 架 五七 冊

内閣文庫 和書 類 三六四五九 號 五七 冊 一七四 函 一三 架

| 内閣文庫 | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 36459 |
| 冊數 | 73 | (57) |
| 函號 | 174 | 325 |

水府志料附録

封外

四十一

国立公文書館
National Archives of Japan

時純云聖護院道興准后回國雑記ニ出ル地名人名等

○小栗といへる所に熊野御社おはしましけり云々

○桜川を渡り侍りけれはこゝちうつろひをも云々

○おなし國山田慶城といへる山伏の坊に宿りて
云々

○九月十三日欲詣筑波山云々

○七絶一句アリ略ス

○みなの川とこの山のふもとになかれ侍りと云々

○はく丸川をわたりけるにいさゝのはしを過とて
哥云

○わたり来て見へたとゝしはくは川
いさゝのはしにかゝる夕くれ

○夜をこめてうかひ川といへる所にて云々

○九月廿八日稲敷の別当ヵ坊より湖水をながめて
云々
○いなみを立て行かるゝ旅はいろ〳〵の名所ト云々
○あやーのちーもいへる所まで奇なり
又云
○拾芥抄云
常陸大遠ミ十一郡
新治　真壁　筑波　河内　信太　茨城府
行方　鹿島　那珂　久慈　多珂　笠間
茨木　秋津
以上三郡不入延喜式田四万二千卅八町ト云々
又云
文章双紙ニ常陸十八郡ト云々

幹規曰コレハ第七巻ニアリ敬佛房ハ四巻目ナルベシ

時綱書小田氏孝朝ヲ吾山権現堂古文書ニ孝頼ニ作ル
○沙石集四ニ云
常陸の國或所の地頭京の名人哥道ヲミラレタル
女房をかゝらひて下云と
此説多氣権太夫と似タリ
同巻
敬佛房真壁の人云々
頭白上人五輪高一丈計天正ノ年号あり东條寺山
築ニ立タリ

水府志料附録巻之四十一

封外

常陸地誌

藤原宇合詩

吾妻乙女

筑波國造

筑坡男二宮

筑波権現

椎尾山最勝寺

きぬのをつくる

筑波燿歌會
櫻川礒邉明神
櫻川乙子王
筑波隱者
六所太神宮
筑波記
筑波詩
筑波天狗
鷲
筑波山人

鳥羽湖
土饅頭
三才圖繪寺社 粟山光明寺
黒子千妙寺
小野御牧
信田三郎先生
朝夷村
源親房著書
関次郎
真壁平四郎

影沼
岡見大膳
浅野長政
龍ヶ崎
啓書記
僧世源

常陸地志
常陸風土記 一 加賀本 柳文庫本
常陸國誌 三
筑波名蹟志 一
常陸名蹟考 一 熊文
當國式社考 一 熊文
鹿島治乱記 一
常陸人物考 一 石川氏
佐竹系図 一 清音寺蔵
佐竹大秘録 太田本民

水府系纂　佐野郷成
額田記
石上軍記　三　或石上記　五
宍戸四郎廟碑考　一　赤水
事蹟雜纂　三十　栗田維良
筑波山縁起　一　羅山
常仙雜録
二十八社考　青山彝
常陸名所考　一　吉田氏
水府鑑　一

常陸荅問説　一　巌肖
常陸圖志　三
小栗記　二十
鹿嶋木縁
水戸往来　一
水戸温故録　三　高倉胤明
常陸治乱記　二十　中山信名
常陸在廳譜　一　同
南常勝槃篇　三　同
関城書考　二　同

常北遺聞一　赤水

武茂郡鑑四　皆川教紀　秀日久方宣明

太田郡鑑四　同　同

封内巡見記一　同

水府略記一

以上載于事蹟雜纂

正三位式部卿藤原宇合

七言在常陸贈倭判官留在京一首　并序

僕與明公忘言歲久義存伐木道叶採葵待君千里之駕于今三年懸我一箇榻於是九秋如何授官同日乍別殊鄉以為判官

自我弱冠從王事風塵歲月不曾休褰帷獨坐邊亭夕懸榻長悲搖落秋琴瑟之交遠相阻芝蘭之契接無由〻〻何見李將鄭有別何逢逵與猷馳心悵望白雲天寄語徘徊明月前日下皇都君抱玉雲端邊國我調絃清絃入化經三歲美玉韜光幾度年知己

難逢匪今耳忘言罕遇從來然為期不怕風霜觸猶
似巖心松柏堅
懷風藻

吾妻乙女

八雲御抄曰アツマヲトメトハ常陸ノ女也常陸ハ東國ノ根源ナリ云ヽ

藤宇合卿常陸守ノ任ハテヽ上道ノ時此國ノ乙女カ讀ル歌ニ東少女ヲ忘レ給ナトヽ云ルヿ萬葉ニ見エ

九 事蹟雜纂

筑波國造

志賀（成務）高穴穗朝御世美都呂岐（ミツロキ）ノ命兒比奈羅布命定賜國造　舊事紀

續日本紀二十九　稱德二年六月戊寅掌膳常陸國筑波采女爲本國々造

一筑波國造

筑波私記ニ曰旧記ニ稱ス風土記ニ曰筑波縣
古謂紀國崇神之世釆女臣友屬筑簟命ヲ紀國
ノ國造トス時ニ筑簟命ノ曰我名ヲ以國名ト
セシト欲スト（神祇史ノ注ニ屬疑クハ為ノ字欤ト又曰簟ヲ一ニ波ニ作ルト）又
日旧事本記ニ景行ノ世忍凝見命ノ孫阿閉色
命ヲ筑波ノ國造トスト又曰續日本記云稱德
帝ノ神護景雲二年六月戊寅以掌膳常陸國筑
波釆女従五位勲五等壬生宿祢小家主為本國
國造ト云々是ヨリ連綿トシテ國造アル可シ
トイヘトモ其詳ナル事今考フ可ラズ旧記ニ
又曰應永五年仲冬雷火ニテ凾山焼亡シ傳来
ノ文書散逸スト

淑慎按スルニ小田家ニ屬スルニ由テ其礼
文典故已衰ヘ天正ノ始小田氏封ヲ絶チ其
門葉モ随テ鳥有スルニ至テ古傳地ヲ拂テ
失スルナラン建保ノ頃筑波八郎ト云者ア
リ即小田元祖知家ノ八男ナリト云ヽ小田
記ニ筑波ノ城主トアリ古老ノ傳ニ云筑波
ハ代々國造ト号シ京都ヨリ下リ住玉ヒシ

ニ此時始テ武門（小田ヲ云）家ヨリ養子ニテ継シ故ニ國造ノ号是ヨリ廃スト淑慎考ルニ喪乱ノ世ノ有様武将ノ威ヲ以推テ養子ト成リ名家ヲ奪フト見ユ彼ノ八郎ノ父知家信田家ノ養子ト成テ小田家ノ元祖ト称スルモ此意ニ同シ小田記ノ始ヲ見テ時勢ヲ考フ可シ又按スルニ國造ノ称今廃スル事ハ當國ニ限ラス諸国ニ絶テ聞ヘス唯出雲ニハ上代ノ如ク國（今ハ國曹ト書ト云）相續テ有ト云其佗モ遠國ニハ稀ニ残レルモ有ヤ昔慕ハシク聞カマホシ

右國造ノ故宅今僧院ト成リ東山（邑中ノ小地名）ノ釋迦院是ナリト云フ或云中頃龍藏坊ト云者アリト又曰大道寺ト云者アリト共ニ分明ノ文書無シ若シクハ其記書アルモ余未コレヲ見ルノ時至ラサルカ

淑慎ハ作谷村餝塚壽碩ノヿ

或説ニ

筑波八郎神郡村ニ住ス元来小田氏輔也土浦ニテ小田氏治滅亡ノ時幼少也後ニ筑波

神詞トナル
神於村ノ東ニ舘ノ里ト云アリ太夫宮ト
云アリ実ニ住スルナラン太夫宮ハ今朝
日祭リトテ里人神供ヲ奉ル神田アリ

一筑波第二ノ宮之儀相尋子候處真疑分明ナル
コトナミ認候モノモ見當リ不申候

一薩都石窟 同七石 一名佐渡カ窟
國澤村ト云處ニアリ此邊山ノ半腹一里程カ
間石窟アリコ數ヲ知ラス追々繪圖差
上度候間悪敷ハ追而可申上候

和漢三才圖繪

筑波山權現 在筑波郡 自椎尾三里 社領五百石
彌神稲村權現 別當 号知足院
桓武天皇御宇徳一上人當山開基而後万老上人
勧請權現為鎮守 源家光公再興
大御堂 千手観音 堂塔樓門最美
末社有九十九社
釈徳一学法相宗于修圓當依和宗作彩疏難破
傳教大師相徳稱之徒一闡筑山寺門葉益茂

而嫉沙門荘修麁食弊衣怡然自怡歿恵日寺仝
身不壞称曰大師但未有勅謚而崇法号之而已
椎尾山　在椎尾　社所百石　薬王寺

多時不觀无明若常若无常若樂若苦若我
若无我若淨若不淨若寂靜若不寂靜若遠
離若不遠離亦不觀行識名色六處觸受愛
取有生老死愁歎苦憂惱若常若无常若樂
若苦若我若无我若淨若不淨若寂靜若不
寂靜若遠離若不遠離

大般若波羅蜜多經卷第三百五十四

さ衣の

さ衣の　をつくはをつけり万葉集に常陸国の歌に　さ衣の
をつくは嶺ろの山のさき忘ら来ばこそ汝をかけなはめ
是ハ衣の紐の緒つくばといふなりさ衣のをつくはねろとハ
つけたる也根を嶺ろといふハ東俗の語なりをつくはハ小筑波
とは筑波の山をのぞみたれいふ同しこころにて　新と云此
つくはの山ハふた川の流おちてつりしき方を雄神（ヲノカミ）と云付
相副る方を女の神といふいにしへ也の神と常陸国の
風土記にみえたり此ハ万葉集にも雄の神女の神とつくはの
山のことを八読たりふたならぶつくはの山とも読たり之

天平七年歳次乙亥四月十五日 法友筆主
川合君溝麿

常陸椎尾山最勝王寺蔵

並とかきり雄の花女の花あるよし心えられハ甚男杜ホの
花とさして書つらむとも読るみし　出雲守筆集

# 筑波嶺燿歌會

松屋筆記五に万葉九筑波嶺の燿歌會の歌にとよめ
ととこのもきつどひかがふ布燿歌会ととと注に燿歌者東
俗語曰賀我比常陸風土記に俗云おに俗云宇太我岐
又云加我毗也なども見えて男女あつまりて遊楽することを常
陸風土記に自坂已東諸國男女春花開時秋葉黄節桐(相)
携飲食齎賚騎歩登臨遊楽栖遅といへるもそれなるべく
しかして賀我比は嬥呼の意にて万葉十四にかくいへるに
可加奈久和之能ともと和名抄十八に嬥讀加々奈久
ともと旧本今昔物語廿六の第七語に大キサ人計

ノ猿ニ一ノ宝倉ノ猿カドメキ云ニ木ニ走リ登
テカドメキ合タリなどあるかどと笑語と同しき聲
をはけてうちさけぶを嗷呼（カビ）とハいへるなり京行紀に
覚賀鳥（カヾドリ）年中行事秘抄に賀我久（カガク）なとあるもその鳴音
のかどと聞えしがゆゑの名なるべし万葉に嬥歌と書る
ハ韓詩外傳に嬥歌雲人歌也とみえしによりたるべし

## 櫻川 礒邊明神

筑波山名跡志曰櫻川ノ濫觴ハ筑波山ノ北七里
礒邊村礒邊明神ノ社地ヨリ出ル社木ハ勿論一
村ノ林ミナ桜ノ木ナリ春コトニ花チリ落テ水
面ニ花ミチ流ルレハ桜川ト名ツク 下略
二十四輩順拝圖會後篇第三 桜川ノ水源ハ吾国
山ノ麓ヨリ流レ出テ礒邊明神ノ桜森ヲ西ニク
チケ末ハ亀城ノ南郭錢亀橋ノ下ニ落合霞ヶ浦
エ出ルナリ 下略 桜子ノコアリ
内百番ノ中ニ桜川ト云謡アリ日向國桜児ト云

ユルヿモノカトハカサレテ東國ニ来ル其母狂氣ソタツ子来リ
桜川ノ花ヲスクヒテ狂ヒケルカユノ处ニテ桜児ニ逢ユルコヲ
記セリ 謡ノ句ニコレハヒタチノ國イソヘ寺ノ住僧云々 按ニ今ハ寺ナシ 又櫻川セヽノ白浪シケヽレハカスミウナカスミタノ浮嶋 按ニコノ哥古ニ所見ナシ作者ノ時ニヨミ入タルニヤ

東軍記 東源軍鑑ノ異本 第十ニ磯邊明神ト申ハ桜川ノ名所ムカシ日向國ノ縣令其子ヲ桜子ト云ユリカトハカレテ常陸桜川マテ来リシヲ磯邊大明神ノ社僧神宮寺買留置ケル日向ノ母尋子テ云々 コノ時ヨリノ桜川モ世ニ聞ユ常陸桜子ト云花今ニアリ云々 按コノ時ヨリ聞ユタリト云非ナリ 桜子ト云花ノ名モ未聞ヿナリ

事蹟雑纂七

## 桜川乙子王 浩沛

歌は扁さの人にあしらへ〳〵なま中のま振にきてしか百年を經て
文永元年吾妻にくだり常陸国桜川乙子王と云翁に逢て
〳〵 巻二
ひたちの國桜川縣の乙子（ヲト）ノ王とい不翁は扁にゆる渠ハ岩倍
馬王 岩倍光明帝御宇割出羽六十六郡之内五郡号岩城國馬王子右弓削王之子所居右手之孫
の天乗乃子猿丸大夫と云し人あらしの翁なり 齢は百と
せといくつかを孫ありと云へすど知れぬは八十年あまりの
両親にわかれし我乃何事ものよみて常に罔魎山姫狐を了（ヨホロ）として
性ふ—— 巻二

此桜川のこなたに筑波に仙女ありて清き流をながしにて夜に遊
山河に井の嶽といふ所に夜国風来りて理趣仙人に寄の行
志よしつり　日巻
常陸なるさくら川をちかき古名間　名所也とし
源義家みなもとは岩城に入ていでけるとき常陸の国をめぐらして海辺
小名郷にて多賀とりて四十万石領の司となりたまふ
陸奥後に陸尺源頼義の姫君は常陸笠間の城に気
持女ありて八幡太郎が女とも海辺の小名郷は常陸ノ大掾
西香代に源清行の子なりて亘持すりて陸奥に移り育く
し陸奥も命百十歳をもちて新羅のとふさを見給ふ事

石夜の記

筑波路記

常陸乃国にて筑波山みなの川桜川は名のみ聞えし
あづまのくちうもさにて言葉のかげはをしるしめ給へる
此郷ほとりにきこゆるなれ於戯都より思ひ立
時なりぬ筑波山に登りて見れば木々の葉すゑを余そ持
とさけく日影にうつる志づ山の浅くさとりして夜来る
をそ思て見くは心へ遠き里をもゆる廿四町余りて
向ひに見やれば東西南北の山方みさりて小の方を流るる
山鼻乃岩つゝきに浮びてひとつの紫の唐持方之
男体ずもと見かへして云ふ所逢こそ方にて候はず

むへ人のよゝれ経や西行法師の清書残りたるもてはやせる
事を見しよりこゝろへやみ侍りてかゝる集めし撰
集などたゝ見ては定まる名所とおもひしもいとつきなし
味の戸かしはさくみれハひとりの僧ありてなる法衣の
すゝ首をとりかゝるを常に今より勤行のおもしろき方を
いへよりも数私せん静かにこゝろをさたむる心乃さま
をさなきよ拝せ世といひなりいはまことならぬ身の
かりまやかの上よ茅を葺て社を建し茅葺の庵を建し竹松
の枝を葺つくりて竹樋をさし竹のかけ樋の水
岩をそ吹ハ清らなる香炉浅よ煙る香も花瓶ゑ生の

こゝろよのこまをし身よさらぬ麻ぎぬ麻の衣のすそみな
し経の用なくと覚えしき若我きたりなく石をしなきよ［不詳］
し古茶ひとつ盆ちさき桶よ竹の柄杓硯や筆のこゝろ
く手取る事なかしくえ物すきなる修業みるごとに
ふやく表なるよ立よりくる洞房のまさな経文よみ
すゝそいかなる人の庵をとうくしもりくる使よや来ると
いふ名所もとはしと浅よ一日中此僧経よ［鈍ヨ］身だゝなく筆
もなく今堂此事をゆるしきてさしてつゝしむ事もきこえ
ずふしきやうゝつうしるゞし庵つきこゝろ物うかりけるの
いひてんとちゝくようく是やくとかよよ文字すなし

まにれつきんそうまよのつねのやうにきこえ侍る身まや
うちくちて芝居にハいつりと脳(あつき)をいためす又(つゐ)悲しき
事ありともつねに普段我に知ぬ此人は生の来
憶をとけめしとさだめ命終の月と定めかすとおもひそする
世にして難なき後世の人をまよハすとうきものは
し世の常なきを知つつ山中に入らんとしへども又いく
のがるき人を見ずしてまよひありき反古をとりてみれハ
類なき筆の跡にしておもひやり云々と隠者の心
より和歌を作らすし山居を屛かして読るにや
筆のたよりすむ山ありところえなる此の名の明そ記されける

一　西行の心と申して
松島に至りとハ志とふ所ハあり奥よりかくの山をこえて
それも花ありて
一ともの木のふもとにて かよひげハことしきりのまの月
秋みずんのおとり
花まもる庭のやまざくら又そうき花を見ければ
後鳥羽院の此のうたなるべし
かきりあるハ酒の欄に侍りて寺籠の庸も春ハそれに
此身を楽するは酒の機隠居乃風そより此人も雨を離
まつりみくる世に経まつりはすさし海上にいくまくの花

さとりえて此山にかくれしかこそうかめ此後隠州住
りの彼寺に住り左高よのそさる僧をちかとゞめしと之
ところに名をちかね八道のかどもその人のうちさを
語られ宗まもる人あらましかバ出家事のことを及其中に
名ともちしきるりの高り思しをふつりに名利を捨る
人にハみえり古今集人ども多く自らよめる事多く見え
修道でも事あらそひ生ハのこり侍る物故唐をふかく難
として一遍への煙となし形骨を本意の路絶ときを
とりもよりやるとて

さら月を松ふく風にあくさみてつゆのいのちも煙なりけり

是より僧都に随て学文られ猶自身をかくさめちからさき
こゝろあるに唐むすひて念仏する僧の本意ならさる
事を語り本意とも聞えしとおもへば一倍すゝえ
後の事になるとても素の為縁あるまじく侍る
とも思ふくはるひ物をすゝめも本物などの新
まして詠はる節にしき事八段に一般と尚り能
あらつきもまりてぬ

宗祇諸国物語 二

筑波山二所大神宮　神主沼尻信下　長戸山城守

山上ノ宮也

男体　伊弉諾尊

女体　伊弉冊尊

安座常　月読尊

渡リ　蛭児尊

小宮木　素戔嗚尊

稲村　大日霊尊

大形村　山田ノ町ノ也　下ノ上云ふ　長戸若狭守喜真（ヨシザネ）ノ云神名帳ニ

大二座小一座ト云ヘルハ安座常小宮木稲村ハ小二座

一四十口モル卜云也ト若以ハ也ト山藤守伯父也 大形村
八ヶ所ヶ花浪一里ノ所有之也
一名 錦共 花波なり 人表紙とも

難波紀六十巻 抑云難波山浪花維主在之トアリ 知足院
第一巻 山海経 讃岐 備前の国并ニ十四ヶ所 数をしるすのみ
次ニ備前の中ノ井 名ニ摂津播磨明石ニ所ニ在草部
第二巻 摂津ヶ国ノ程の所の中井あり
第三巻 摂州の国葉原ニひかれて 摂津播磨ニ来る人
あくまで 摂の東のあかりの ひろきの又 難波の山を越すも あめ
のも 文 花葉此処 摂す 〇 又め石の国 男御め御命
出し来るに 巻此処れ 来て りまや云ふ数々 一万余も在
天下 〇 難波山の奇数くもの ますつとも かろき代の
弥も云るとも かりよきぞる山の名をこん 此巻末 天山十八

自序宮四月十五日より流泊以後正紀之とあり
第四巻　葛城山異名七種　組号十種異名三種秘称合之
十名男伽並[illegible]
第一　葛城山第二　妙高山第三　大峯山第四　金剛山第五　何
字[illegible]山第六　天生(アマツウ)新(カツ)山第七日寄山
十種名　葛波山第一　波葛山第二　葉波山第三　赤紫山第
四[illegible]山第五　天照山第六　[illegible]山第七　生老山第八
字[illegible]山第九　宝[illegible]山
○三種第一　高峰山第二　善南山第三　錦連山
第五　葛城権現[illegible]　三条大閤と[illegible]御座のす

第[illegible]根本のす
一第六　伝法大師　海[illegible]上人
桜川　[illegible]上の山ハ[illegible]の桜川[illegible]ハ[illegible]
[illegible]桜川御[illegible]
第[illegible]縁起のす
明和八年
一九月六日小池氏同伴葛城[illegible]関[illegible]
以上峨眉[illegible]
住吉　紀劉
上町より三輪新田川和田等[illegible]淵　水戸より十町[illegible]川[illegible]泉新田　住吉
[illegible]山深[illegible]新田より[illegible]山深より[illegible]十二塚小幡
[illegible]稲村[illegible]大宝[illegible]十一[illegible]日吉　右之
[illegible]奥流　西

手綱 多宝 三所 薬師 聖徳太子 堂前南面 西男体 東女体 男体の分水
戸為 東山 支院 方 子ナ 如意山所写 申 江戸 石二分 三寸 南 府中 己
女体一 此方 一里半 支分 阿原 沢 三十ヶ所 観音 支波 莊 銘 二丁 半 峠 流り 出 如意
梅 御田 へより 三丁 詣舟 稲村 嶽 三丁 十面 三丁 廿 ヶり 稜 中の 岩の 側より 見ゆ
一 薬師 弁天 天原 前あり 此坊 真 見院 大御堂 小方 相つの 前 筑 原 東山 所と 山 三
ケ 筑波 より 十五丁 見っくぶ 峰 光 里 也 東 此里 くノ 出り神京 さ 山 ちり 猪 ちっけ 廿丁 ハ 稲村 図
此 完 社 より 此 布分 下 去 筑 十二 里 多 支 前 筑 へ 十八 里 支 出 二丁 廿 の 波 溜 あり
東 ちっけ より や おとうり 十二丁 西 神 あ 此 以 此 御 小見 善 之 霊 あり 此 身 の と より 青谷 分九
一 里 下 平 松 色 山 よ り 新田 年 加 新田 下 岩井 田 上 岩井 田 村 里
新田 神 京 以 営 塲 板 橋 縁 田 谷 田 部 刈 手 一 矢 玉 戸

一 天崎 小條 神部 向井 筑波 与那村 弥り 起し 筑 所 碑 史 殿 石 亀 の 峰 夢 の 出 来
高 支 村 東 多 神 社 見 佐 志 の 方 社 之 菩 世 川 此 中 ヲ 流 ん
向井 里 今 川 東 港 不 気 去 盤 限 前 る 紀 高 梅 ノ 二 字 の 来 よ
一 菩 恐 新 志 盤 陀 前 不 見 限 来 以 蛍 と あり
筑 波 花 へ 二 手 め 本 字 沈 岸 雲 母 方 解 石 令 斤 石 限 斤 石 筹 亀 峰 史 殿 石 傍
一 草 也 以 出 来 兎 あ ひ こ
大 御 堂
一 小 桜 原 山 最 頂 王 寺 菓 也 三 尺 建 立 定 板 仕 よ あり
一 多 波 山 つ く ま ね の よ ふ ま あ ら し た こ の 歌 れ
て ら よ り お ト も つ ま あ く

一 山家町 須川村 山家峯人 日本寺山中にあり

一 日吉田村にも 其証無

一 寺名村清水寺 旅にも今は無なりし故 吉田の宇甲斐寺 是佛塚
（須川村の並ナリ 吉田村にあり）
のあり

一 つくもの内 吉也上人御ノ時の墳石 あり其高さ六尺ほどは
其上は川の内山より出て 穴をほりてあり

一 清西坊と花波乞と云あり

一 山田西町 小泉村あるは山家小町 古跡ありと云 門わら此須
（山家の南場とあり 豪農なり）
又泉四家にあるべし

一 さやの一念寺 山田にありの 又ヅハク上人ノ事 （一念寺にあり）
古跡あり 又曽門ちとこあり

○ 山田塚 寶積山 善行墓あり 須賀村

○ 庵寺と云不断つゞく上人墓あり 西山十一面とあり

○ 花波寺一里さやの東方八塚とあり 同縁起見べし

○ 其あり此寺は西光院にありし

○ くらやみ ○山田村 薬師と云寺の東に古塚あり

○ 男体女体の宮を云ゆり 東と云 それより横道をすぎ少し出ると古跡
又横道と云と 称東寺 抄證 山田村之

一 神谷村 飯田西条（俳ノ名 不井） 神谷村ノ地ノ並て須川村あり 此とき山家
草案

一 つく（覚）上人 山田にて見西 蓮ノ谷一念寺にあり 蓮華ノ墓所分

国立公文書館
National Archives of Japan

神郡八井

菜摘しといふ 須弥山井ありし 修理亮原下ツクリ志賀桜ノ方へより
ちる八家あり 花波分 こゝにもあり
○当ノ横尾と云所ニチイ清水原下 西名とりて 号竜ノ子と兼続
あやしきちいへにまして 山窠と 八幡別当の山城の院ともの
ま大石四妻 岩あり 是名のよふに みて 陸奥の国まへん
ちゐ風を さふにも 其の年 云ふを 新しく 時の所
名也

一 臼井ノ四井

一 神郡八井 飯田井 桜井 富田井 市村井 二桜井
塚代井 榎戸井 今井

一 六所ノ毎年二度の御幸 陸奥ノ末ニ六所ノ御幸あるとある
こゝの河原 日記ニ有り

一 つくはねの山嶺より落るこゝの河深き所ありて すなはち男女の川
なすと云 あすか 陽成 院の御製 みそ よの 歌人 よみつゝ
此名のところゝゝし よりよ詠つめるとのこの筑波山 落る山
落る名ハ 額也 常陸 及ひ 代を 詠ふ 歌人 高く 二並る いの字
のよくきりて 西ハいさ 所多 男神山 東ハいさなみ 女神山
とられ こゝの 河に そり いつ名の 共に 出ゝる 川
のり 末ハ 桜川に 落て 淵となり 流の むすふ 桜川 と云也
の名ある この かのりと 落て 山 落て 云つくはの 嶺の 河

こゝにおいて以てまたもちぬきてをおさめしと
其よりまたやうく三つの文字のちに武庫山白上に尾張高
一 難波名跡志 安倍一名川 摂泉擬行
一 村の嶽 平天相野続のありし下稲村摂陽の三ちを可禾を
さゝても鏡手の才もめてと云
一 宝珠嶽 大江貴命社 并亨石 明星石 中宗寺社 姫見節
あと常社 豪書 赤雪嶽 帝都五
一 此辺都り古来名所を呼ぶ寒りも可其松れ
一 京都より 世戸大江寺 大宮寺に可 ○浪花 京都並二人
宗戸巫 ヨ法 巫法 山城 神祇村に在
○ 山崎村の隣村宮ヨ村に在り 安倍晴明出生地伝 明所稲荷

是より文吉群郡に猫島江村と難波の三里中ありと云
明所ら山下すなの地と云 ○くちら名 香は山の村の内也し
○ 難波記 三巻難波 摂州志とあり
一 安部の朝みちの村浪花より土民木 明人七ちなみの人出づ 主膳
其手江戸掛文 浪つく山法城段度ら足人振稲野あと云
○ 尾谷村中 松谷他名家 英字叙監伝
○ 尾谷ら 古家一里一之谷一里 土師へ一里 可乃倍谷村済あり
解関ら里 上町へ 三里
以上我盾筆記

筑波吟　心越 東皐菓七

快哉筑波吟。四日多苦雨。仰面只淋漓。擧頭但雲霧。脩篁翠靄蒸。古木蒼煙護。重復轉崔嵬。踴躋地（忙）追赴。軒家（窓）綴玉成。殿閣純金鍍。冒雨悄共過。暫息日常暮。

雨中望筑波山　同上

風雨蕭々客路賖。筑波半是暮雲遮。山幽径僻人希到。湾畫煙村數十家。

筑波　板坂為篤天和壬戌紀行朝鮮李鵬溟洪滄浪両批

筑波頂上有両峯祀伊弉諾伊弉冊二尊号男体権現女体権現又德一之草創也本邦之神蹟皆為浮圖被誣誤其本者往々有之若筑波改二尊曰権現（然々）是何謂乎然神之為神豈為彼汚哉雖換其名神不以為心焉予為弱冠與同遊躋攀得拜両社思其同遊或死或去予又游學于雒矣其後思武陵之老母還自雒偶以身之貧（貧カ）受微祿稍食於岩太守有年其間半在武陵半在岩山寧雖之定省毎歳問寒暄然近者尚迫立錐頻辭太守之咫尺退居于岩山三

（朱書）公之言格論也我國六十年来不用浮圖我王之崇儒術可知矣

（朱書）公之直言感慰

（朱書）良嘆々々

年也、不孝不忠之甚、可愧可悲、此行也、賜新加之秩

（公之秩比之樂天既過于中年功能進又到二千石乎）

二百石、月俸々錢共三百石余播美於故里、剃過阿孃之老無

（讀此條頗識公之）

恙、嗚呼岩太守之恩渥深也矣哉、歳月未幾國家草

（有孝心何憂前事耶昔百里奚用於秦周成叔終于爐旱豈為不孝耶時運今然也不知時運非智也如何々々）

洪基、民物多相變、豈無感慨乎、因雇乞刺史、寫情懷

云、

山遊（山字改作遊字乎）九昨夢同志半歸泉（古今常理）風色尚依舊村煙半換年

青松長欝々翠竹自妍々喜毎老將健富貧九（元）在天

（讀而有感）

又

数片白雲封両祠神威高烜半天陸二山秀出跨常

輿末見士峯見筑波

（風土可喜之吾儕東行見士峯郷心已切不見士峯見筑波亦然乎）

筑波山　稲吉驛作　　　　小宅生順

土人謂筑嶺為御筑波、按萬葉集有乎筑波句、乎之與御、倭訓近矣、國俗中世以来有推童之語、則必称御、土人聞乎筑波語、誤為推童語、而所称歟、

襄懷海水國將瀦、昔（神不築）日無山吾是魚、莫笑（怪）方言添一

御、東呉南越有勾於、

又　高原驛作

浮屠氏謂筑嶺為飛來峯、其説曰、竺乾鷲峯（五臺山）裂分、

飛来于我國、一為黒髪山（芳野）、一為此山、故名飛来峯、

予按両山共是關東名山、相並、靈相並、故以両山

（後撰集
唐土ノ筑波ノ山ノ枝
茂ミ君ガ御影ハミ
ミキ哉
又古歌ニ
唐土ノ吉野ノ山ニ
籠ルトモヲクレント思フ我ナラナクニ）

右ノ如ク覚ヘ侍ル
ヲハ如此中テ尽ス
奥ノ又黒髪山ノ迄
趣多クハ未ダ方ニ
未知ス神ノ迹ニ
ナニヲヘシ

朱批ハ八十九翁ニ知

爭伯仲、毎々如此、而所以有此説何也、黒髪一名
日光、日光或作二荒、依倭音相隣而借用之而已、
二荒倭訓近二裂、筑字亦与竺音相近、故托裂飛
之説耳、

鷲嶺飛来止此處、如是我聞釋氏語、飛来一語若無
欺、恐是有時又飛去、

又　方倉驛作

雲端一髮筑波岑、吟望初忘羇旅心、小魯曾遊未遑
慕、先思仁政比重陰、

寛文元年　鄉遊漫筆

筑波天狗

我邦自古稱天狗者多矣、、、其中鞍馬僧正為巨
魁、世之所稱、、、常陸筑波法印、、、

神社考

## 鷲

筑波ニスムヨシ萬葉ニモ詠シタリ其外諸山ニアリ
八雲御抄曰ツクハ子ニカヽナクト云鷲ハ高山ノ物也云々

事蹟雑纂九

筑波山人

南郭集二編四 送石仲緑還筑波田廬

憐爾青々客子衿。妙年歸住筑波陰。中原罷去游梁賦大嶽登臨小魯心。曝麥坐来時雨度。帯經耕處午雲深。主人一送相思否。勸酒聊歌東武吟。

鳥羽湖

常陸風土記筑波郡西十里在騰波江 長二千九百歩廣一千五百歩

萬葉集

常陸國志大寶湖在西河内郡大宝村東西一里余南北六七里許考万葉集所載鳥羽湖或謂此湖欤古新治郡地

一鳥羽湖
常陸国志ニ曰大宝湖即鳥羽湖と云々国誌ニ云
東西壱里餘南北六七里とあり古老伝説ニ当
時之大宝湖より東七八里ニ間水海道筋迄近
昔時の湖水なり今田地となる作去折ニハ真
薦ニ根なと掘出ことニし今の湖ハ往古湖ニ
深き変換りしらしと伝ふ湖水ニ縁有地名共
仮証有といらしたりれハ鳥羽湖共なりんり
こ作谷村寿碩白ス
一大様ニ住多気山

常陸國志ニ北条関基城主多氣太郎義幹ハ大
掾氏ノ世系也
或云山上ニ水なし故ニ滝の一字を呼ニ云
り亦一説多氣大掾ヲ築城故ニ多氣の古城と
云り
亦一説此山ニ雨ヨビ石といふあまり石より
白氣ヲコルトキハ雨フルト云ユ故ニ多氣山とも
云ヿ雨の日山上を見るニ白氣石上ニ起ルヿ
必せり古老此説是也と云テ多氣山と称ス此
山ニ限ルとも云ヽ 甚久ハ追テ繪圖ニ認差上申候

土饅頭

常陸國筑波郡足高（あこう）といへる里の山を堀れバ土饅頭（つちまんぢう）といふ
ものあまたありとぞ 金子抑へたる人あまたをはかりきたるちひ
さなる かはらけのさまして花に似たるかたちありから國
に海燕といふ貝ハこれになずらふべし 相馬日記

和漢三才図絵

鹿嶋大明神　在住吉　社領卅三石

同　在大国分村　同廿石　住吉支

同　在河内郡大奥村　同卅五石　河戸

八幡宮　在河内郡中之郷　同五石　大宝寺

西古権現　在志屋郡　同十石　正伝寺

高幡山　在志屋　又吉　寺領四十三石

清泉寺　在下郷　〃　〃廿五石

千妙寺　在志子　〃　〃百石

大宝寺　在下郷　志之　〃　百石

事蹟雑纂十二
本願寺由緒記云親鸞上人常陸國下間ノ南小嶋ト云所ニ一宇御建立アリテ此寺ヲ蓮位房ニ住持セシメ給フ是ヨリ下間ノ蓮位房ト云ニ其後蓮位房上京ノ節小嶋円後入道善可ニ譲ル善可子孫代々相續シ今常州下間栗山光明寺ノ境内京東六條附キ三月寺コレナリ

五宝寺　在同所　〃寺領二十石

来迎院　在土屋　〃〃百五十石

金剛院　在同所　〃〃卅石

円福寺　在同国同郡成吉 同所　〃〃二十石

仏心寺　在土屋　〃〃六十石

多宝院　在下妻　〃〃百石

三月寺　在同国同郡下間　東派異本七ヶ寺ノ内

開基　小嶋山円後寺以反号下房

親鸞聖人於小嶋山元仁二年従円後寺移同依之號剃髪号之可而聖人建一宇使蓮位房住持後号

信上人當時讓于光寺門家の相樹乃聖人所持也　蓮位源兼政之孫　仲良ノ孫　実良ノ子　宗寺也由来寺家老称下云之

光明寺　在同所　東派異本七ヶ寺之内

開基　明空法師

明空ハ三浦大介義明四代孫三浦十郎義忠長男義澄之孫久二年発離塵志薙髪改名可忍依值知識法然御房当時上京依蒙恩趣小嶋謁親鸞聖人為弟子改名為明空乃建寺号弘浄土真宗元仁五年二月十五日寂寿六十三

和漢三才圖會

鹿島大明神　在大國分村　社領廿石　新太夫

八幡宮　在関生福寺　同十五石　観音院

同　在飯田村　同十石　普泉

同　在平沢村　同十五石　常福寺

佐伯明神　在雲原　同四十石　山伏

鴨江明神　在大泉村　同十石　[illegible]太夫

山王大宮明神　在　同四十五石

今村村明神　在　同卅石

明神　在江村　同十五石　宮内

極楽寺　在長岡加治山　〃百石　円鏡寺
若貝明神　在子貝村　〃十石　社家支
古天明神　在内郷村　〃廿石　当寺
逆修明神　在　〃三十六石　當教坊
金光寺　天台　在　寺領三百石
観音寺　〃　在中鏡村　〃四十石
神宮寺　〃　在勝尾村　〃二十一石
西原寺　〃　在　〃四十石
千福寺　〃　在山尾村　〃四十三石
千妙寺　〃　在見子　〃百石

西光寺　在稲岡村　〃三十石
　有釈恵心上人作弥陀如来本像
最勝王寺　在　〃百三十石
大覚寺　在岩殿　〃三十石
普門寺　〃　在神社　〃三十石
龍蔵寺　真言　〃四十石
前之坊　〃　在　〃四十石
長谷寺　〃　在勅使　〃三十石
龍昌寺　済家　在山田　〃三十石
神光寺　〃　在岩尾　〃三十石

浄光院　卅宗　在山戸　口十石

西光寺　ヽ　在揚田　ヽ四十石

来行院　山伏　在家上　ヽ百三十石

秀按以上題ふ分の考

黒子千妙寺

松倉大聖院来談本寺黒子千妙寺西河内郡ニアリ延暦十一年ノ開基ナリ寺領本千石アリシカ何レノ世ノ事ニカアリシ罪人ヲカクマヒタル咎メニヨリ減メ三百石ニナル千妙寺ノ灌頂ハ佛祖ヨリノ正統ニテ天下無二ノ灌頂ナリ延暦寺ニテ灌頂ヲ傳燈大法師タルモノモ黒子派下ニ来ル時ハ行ハレズ黒子ノ灌頂ハ天下行ハレズト云フコトナシ黒子ニ勅印アリテ灌頂ノ僧ニ補任五通ヲ授ク三務都法大阿闍梨權大僧都法印大和尚ナリ法親王灌頂ノ時ハ黒子住ノ僧正上京メ授ケ奉ル事ナリ　文政五年九月三日

一日高見一冊

右之通差上候故　篇候

良公様御若世太田野村江中之彼御同り之比ニ

御噂と見へ申候

一小野御牧日高見ニ　見候へ　信太之郡と

いうハ則日高見ニ而小牧ノ考ニ而志るし並

申候小牧ヲコウマギと訓し候義意之而其候也

訓又小ヲおもと訓し候處ゟ御といふ字ニ撰り候

出来一ト先ツ御高案奉願候色ニ申上候義ニ其

候へ共此段ニ有略仕りく御願ゟ已申上候筆

〻一丁半中上以上

六月十五日　高倉逸齋

逸齋又曰小野御坂ハ今行方郡ノ大生
村ナルモ知ルベカラズ水草共ニヨキ
所也

次郎諸門様
　御膝下

過日中上候ヿ此郡波上観音列留不傳之
古書寫ヿ差中候未夕御説も承知成候ハヽへ
御説可申上候以上

一 別紙ニ京都ヨリ新説聞書差上中候筆ー

義經記

常陸國ニハシダノ三郎センシヤウヨシノリサタケノベツタウマサヨシ
牛若クラマ入ノ事

常陸ノ國ニハシラト〔白土〕ナメカタ〔行方〕シタ〔志田〕トウテウ〔東條〕サタケノ〔佐竹〕ヘ〔別〕ツトウヒデヨシ〔當 秀義〕タケチノヘイムシヤノ太郎ニホヂミナツナ
頼朝ムホンノ事

其國ハ常陸ノ國カシマナメカタト云アラ礒ニソセイシタルモノナリシタノ三郎ウキシマノ有ケルけモ常ニ行テアソビケル
義經都落ノ了

平家物語

常陸國ニハ信太三郎先生義教佐竹冠者正義
源氏揃ノ段

朝夷

信太郡ニ朝夷ノ邑アリ和名鈔今本ニアサイ(ロ)ナ
ト訓セシハ非也」アサヒ(ロ)ナトニフヘキ也」夷ハ鄙(ヒナ)ニ(ヒナ)
通ノヒナト訓ス後世朝夷名（國志ニ出ツ）朝夷奈（神社考）ニ作ルハアヤマレリ
朝比奈ハ難ナシ　事蹟雜纂巻二

源親房著書

櫻雲記曰興國二年源親房常陸小田ノ城ニ居シテ職原鈔二巻ヲ作テ吉野ヘ獻シ奉ル今東國ニ在テ文書ノ一巻モ不讀ノ輙クコレヲアラハス凡人ノ所為ニアラズ

國誌頭書ニ白河結城文書曰興國二年二月親房禅閤於常陸國関城作職原抄二巻奉獻之云々

関城ニテ作リタル故ニ一名親房関城書ト云

職原通考ニハ神皇正統記ハ親房卿常陸小田ノ城ニ於テ職原鈔ト共撰セラレタリ 以事蹟雑纂巻二

秀按ニ白河結城文書ニ此事アルベシトモオモハレズ再考スヘシ

平治

常陸ニハ関次郎時貞

保元

常陸ニハ中宮三郎 京師本作那珂郡三郎 関二郎

常陸國住人関次郎俊平計斤手夫注ゲテ立タリ臆病ノ殿原哉風ニテアル者ヲト云ケレハ各笑テ寄タリケリ常陸國住人中蔵三郎押寄大事ノ手負テソノキニケル 平井本巻二

左京大夫入道ハ常陸國ニ流巻三

眞壁平四郎

相傳ヘテ云平四郎ハ眞壁ノ人也初メ公卿ノ家ニ仕フアヤマリアリテ木履ヲ以テウタル四郎憤リソノ木履ヲ請テ出奔シ終ニ唐山ニワタリ徑山寺ニ入リテ勤学ス学成ニ随ヒ俗情ヲ脱シソノ木履菩提ノ縁タルヲ感シ錦嚢ニ盛リテ皈國ス北條帰依ノ松嶋圓福寺ヲ開キ住セシム其時ノ偈ニ

遠登徑山分風月　歸開圓福大道場　法心遠得無一物　元是眞壁平四郎

今按ニ東奥紀行ニモ載標註云松嶋寺慈覚大師開基天台宗也自時頼入道使法身師住持爲臨濟宗号圓福寺事詳東國高僧傳法身又作法心

紀徳民遊松嶋記瑞巖寺入門左崖腹之穴可容數十人曰無相窟開山法身趺坐處師姓真壁字平四如宋傳道歸云々

沙石集十曰松島ノ長老法身房ハ晩出家ノ人ニテ一文不通ナリケレトモ宋ニ渡リ径山ノ無準和尚ノモトニテ円相ノウチノ一ノ字ノ公案ヲ得テ坐禅スル事多年尻ニ瘡出テウミクサリ出ナンドノイツルホトナリケレトモ九年マテ常坐シケリ云々

予カ蔵古本ニ朱書ノ曰真壁平四郎ハ奥州某ノ臣下ナリ主人ニ履ニテ額ヲケラレタリコレヲ因縁ノ發心ス尾曰慶長十三年ニ三蔵院求之フルキ朱書也

事蹟雑纂七

影沼

松岡玄達結毦録下巻曰常陸影沼ハ人物ノ往来スルサマ影ニウツリテ見ユルナリ即唐土ノ書ニ出タル地鏡ナリ

當國ニコノ不思議アル事ヲ聞ス影沼ト云ヘル所マク聞ヘス菅谷村ノウチニ影沼ト云ヘル処アレトソコニハサル事ナシ今按ニ出羽ノ影沼ヲアヤマリタルニハアラスヤ龍宮船云陸奥出羽ノ邊ニテ春夏青天ノ時分野中ヲ先ヘ行ク旅人ヲ跡ヨリ見又向フヨリ来ル人ヲハルカニ見レハ四ツノ土地大ナル浪ヲ起シ水玉ヲ飛セテサナカラ大河ヲ越ハ

ワタルコトク見ユルニチカクヨリテミルトキハタヽ白河ノ道邊ニテ
水ノ氣モナキ所ノ者ニタツヌレハコレハコノ所ニテ影沼ト申テ
昔ヨリカクノ如シトイヘリ清暑筆談ニ總ノ廣キ野中ノ
陽燄ヲ望メハ波濤ノ如ク奔馬ノコトク見ユル物アリコレ
ミナ天地ノ氣ノ絪縕ノアフルヽ所ヨリ變化ノ象ヲナス
アリトイヘリコノヿモミヽクハ當國ニモマヽシニハアルカサレト
モ結毦録ハ詞タラスシテソレトハ知リカタシ　事蹟雜纂云

岡見大略

山伏塚　三峰堂辺小西の角南沢寮にあり天文十七年のころ
常陸国多気中務大輔の身多気大掾修理の婿和田
三楽を好てらゑんとあり当國に来りける時岩山あたり
尉が家の子計放大三郎飯倉深志見と大に喧嘩しつ
るに此所にて追付し城里人らつめ山伏塚と呼しとそ
又より古バくたりなむ也あり寛政の末者常上人こゝ
に住ける時志ましに標をたし標の塚をたり　西林院
まおく四向あられし其の塚あらし　言路右のこれり
三縁山志十一

御手判帳　元禄前

一　五万石　常陸[illegible]

浅野長政

慶長七壬寅年長政隠居ニ付所領常陸国真壁之城
地五万石并真壁知行領分五千石隠居料也
同十六辛亥年四月七日長政春秋六十五常陸真
壁ニ而逝去之刻知行所同所伊西寺ニ葬ル法名傳
正院殿功山道忠大居士と号候
同年六月長政之遺領五万石者三男浅野采女正長重
賜之真壁知行五千石ハ差上

右浅野家譜

龍ヶ崎

慶長十一年二月八日政宗か家子ちゝもに在陣出龍ヶ崎の

地頭ひ　こし龍ヶ崎といふ所の

地なりや　ありけん

舊紛譜　伊達

## 啓書記

義堂空華集常陽啓侍者ニ贈ル文アリ
畫家啓書記ハ當國下舘ノ人アリ其遺墨多クソノ
邊ニ存ス中村氏ト云ヘル人ナト多ク所持ス子孫
今ニアリ
本朝畫印傳曰僧祥啓所謂啓書記ナリ或ハ雪溪ト
称ス又貪樂斎ト号ス又休月斎龍杏ト云康西堂
ノ弟子也或曰下野國宇都宮ノ畫家九良氏ノ子
ナリ建長寺ニ有テ書記トナル墨画ハ牧溪ヲ學フ
其傳圖文ヨリ出タリ佛像人物山水ヲヨクス尤雜画ニ

エナリ

畊林集曰啓書記洛陽ニ入ル畫師藝阿弥其畫ヲ見テ高致アリト称シ終ニテミヒテリノ家ニ至ル平日秘スル所ノ畫本ヲ出シコレカタメニ摸ス此故ヲ以テ筆勢マスマススヽメリ後柏原院文亀年中ノ人也

書畫一覧ニ見ヘタル所コレニ同シ　東牘雑纂　六

僧世源

鎌倉建長寺向上菴　國一禪師諱世源號太古嗣法佛光常州人當山十七元亨元年九月廿五日世壽八十九ニ寂　鎌倉志

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan